

共産主義派と社会民主主義派の競合と対立

——赤松克磨を中心に——

松 澤 哲 成

一

ふつう大正デモクラシーと総称される従来体制に何らか変更を加えようとする運動は、第一次大戦後急速な盛り上りと発展を見た。だがその後わずか一〇年ばかり経過したとき、あたりにはもはやその影さえ見当らなかった。とくに一九三一年満州事変以降ともなると、一面に国家主義の風潮がみなぎり日本ファシズムが時を得顔に跋扈していた。たかだか一〇年程度の期間に、いったい何があったのだろうか。なぜ、そのように急激な時代転換が起ったのであろうか。

歴史的に存在していたデモクラシーとファシズムをまったく対蹠的なものとは見なさず、大きく異なるものとは認めつつもその間には移行で

共産主義派と社会民主主義派の競合と対立

き得る契機が潜んでいたはずだ、という説明の仕方がある。デモクラシーからコミュニズムへという不連続の史観と、日本ファシズムを起源からたどる史観の不毛な対立あるいはすれちがいが、それまでの研究上のネックであったことを前提とすれば、そういった説明の論理は魅力的でなくもない。デモクラシー全盛の時代にすでにファシズムの思想と運動が一部少数者によって担われていたのは、歴史的事実だからである。しかも、その間に交渉や往來の行われていたことが、今ではよく知られている（一例として、満川亀太郎『三国干渉以後』復刻版、一九七七年、伝統と現代社、参照）。

しかしながら、一部の論者のように、だからすべてをひっくり返して「大正期『革新』派」と呼ぼう（たとえば伊藤隆『大正期「革新」派の

成立』塙書房、一九七八年）というのは、認識力の構造的欠陥にもとづきものでなければ歴史の意図的歪曲である。その論自体、左翼をおとしめ右翼を高く評価しようとするイデオロギー効果を持っている。歴史的な存在としての左翼―デモクラシーと右翼―ファシズムとの間には、ときには物理的な衝突をふくむ客観的な対立が厳然として存在していたからである。一九二三年六月、アナキストからボルシェヴィキに転じた高尾平兵衛が、皇室中心主義を標榜する赤化防止団・米村嘉一郎と武器をもってわたり合い背後から射殺されたのは、その極端な一例といえる。

また、労働争議にたいする「右翼革新」派の干渉、介入はふんだんに見られたが、そのいちじるしいケースとしてたとえば浜松・日本楽器争議があった。一九二六年四～八月の同争議においては、日共系の日本労働組合評議会に属する三田村四郎らの争議指導にたいして、社長の息子で上杉慎吉門下、興国同志会員、大化会員、れっきとした「革新」派右翼の天野辰夫たちが、にわかづくりの日本主義労働同志会なるものをもって暴力的に立ち向っている（くわしくは大庭伸介『浜松・日本楽器争議の研究』五月社、一九八〇年を参照）。さらに、君主制廃止の左翼と皇室尊崇の右翼という、当時存在した思想上の溝は、ほとんど越えることができないほど深かったといわねばならない。

したがって、デモクラシーとファシズムの間の部分的交渉のゆえにたがいのひどく大きな相違をあえて無視するデマゴギッシュな伊藤隆は、

問題の外におかれる。

他方、大正デモクラシーの担い手として、新人会の赤松克麿や麻生久、あるいは社会主義者・山川均に焦点をあて、いずれの思想もがらゐその名に値するほど深い思想的内実を持っていなかった、つまり「信念化」ないし「理念化」された「本来的な思想的基軸の欠如」が見られた、だから容易にファシズムへと流された、という説き方がある（たとえば、高橋彦博『日本の社会民主主義政党』法政大学出版局、一九七七年）。だが、この論においては、「信念」や「理念」あるいは「原理」といわれるものの、真のそして具体的な内容は何であるのか、それはなぜ普遍的に正しいとされるのか、その存在や不在はどういった規準で計られるのか、まったく明らかにされていない。論者自身が先験的に正しいと信じている、「信念」、「理念」の尺度を対象にあてはめそれが欠けている、というやり方である。歴史超越的な独断であり、欠如論といえよう。もともとたいした思想の持主でないのを対象として無理に設定し検討したところ、結論としてけっきょく「たいしたことがなかった」という論理構成になっている。つまり、せいぜい対象のひどさを「実証」したことだけが、こういった論のわずかな「意義」である。では、なぜ、あえてそのようにひどい対象を設定し、出発点に立ちもどる結論を下すというトートロジーをおかすのか。研究者は論文を書かなければならぬいからでもあろうが、またしばしば論者の現在、とっている政治的立場に

もとづくものでもある。高橋彦博は、第一次共産党の裏切者である赤松を、共産党創立者にもかかわらず労農派から戦後社会党に走った山川を、日本共産党主流―講座派の立場にたつて多少緻密に断罪したと認められる。この点に関しては、敗戦直後当時の日共主流に棹さす内田穰吉『日本資本主義論争』は、より露骨であった。論争の一方の当事者である志賀義雄の立場を全面的によしとしたうえで、赤松を「右翼分裂主義者」ときめつけている（新興出版社、一九四九年、上巻四九〇六八ページ）。対象化のきわめておくれた分野であることが痛感される。

また、高踏的な裁断は中止してある特定の人物（群）の変化⇨転向と不変の各要素を微視的にたどって行こう、とする接近法がある（たとえば思想の科学研究会編『共同研究 転向』平凡社、一九五九〇六二年）。同書で「前期新人会員」として赤松克麿と麻生久をとりあげた判沢弘・佐貫惣悦論文は、前者に関し、共産主義⇨右翼社会民主主義⇨国家社会主義⇨日本主義⇨東洋主義と目まぐるしく思想変遷したが、ナショナリズム、天皇主義、文化主義、モラリズム、貴族主義、仏教といった要素、一言でいえば「一種の精神主義」は不変であった、とする（上巻六九〇―九三ページ）。その個別主義的プラグマティズムの方法によって、対象とされる思想あるいは人物につき批評的伝記としての基礎が固められた研究史上の功績は、少なくない。だが、いかんせん広がりがない。デモクラシーからファシズムへの推転はどのようにしたら食い止められたで

共産主義派と社会民主主義派の競合と対立

あろうか、という「戦中派たる……感懐」が結論（同一一三ページ）。ただしこれは麻生に関してのものだから、あまりにも限界があるといわざるを得ない。赤松についての総括は、さまざま外国料理を食べ歩いたすえやはり長年親しんできた淡泊な日本料理に帰るようなものか、としている。あたかも論者自身の嗜好を反映しつつ赤松の軌跡を肯定するかのごとくになっている。その方法論から直接に帰結された破産、と見なされよう。

われわれの態度は、個別にもとづきながらも、そこから普遍的、一般的なものを抽き出すこと、あるいは個別をまとめ束ねて一般化へとつぎすすむことが、まず第一である。つぎに、よりいっそう広い視野に立つて、時代構造を総体的に促えようとする。すなわち、急激な時代変換という時系列に沿ったアプローチはいったん背後において、一九二〇年代という時代はどういった構造を持っていたか、を端的に問うことにしたい。右翼と左翼の交渉・往来といった特定の一部ではなくて、そういった部分多数によって形づくられるピラミッドの全体を把握する努力が必要なのである。現体制・権力と社会的・政治的な運動との牽引と反発をひとつの軸に、アジアと日本の関わりをもうひとつの軸として、大局的な流れをおさえていこうと思う。第三に、デモクラシーからファシズムへの推転を他人事として高踏的な超越批評の視点からアプローチするのではなくて、当代に生きたひとびとの立場に立って、ひいては現代に

生きるわれわれひとり、ひとりにとつてもまったく無縁ではないものとして、促えることを試みていきたい。

それではまずはじめに、背景となる枠組を簡単に概観しておこう。

二〇世紀初頭以降、桂太郎を看板とし諸分野官僚をつらねた山県閣と、西園寺公望をトップに載く原敬の政友系勢力の間に力の均衡が成立し、政治権力は両者の交代で担われていた。第一次大戦後、原―政友勢力はこれまでも多用したやり方——それまで突発的に現われた民衆の集団的実力行動を掌握管理できるのはわが政党だけである、という論理を使い、山県有朋を脅しついに権力をもぎとった（原敬は自身それを信じていたふうがあり、山県もまた民衆の力の抑圧を原に委任した、という側面もあった）。政党は、資本主義経済の発達にともない増大した資本家と地主の力を後楯にしたことも、見逃せない。政党側が同様な論理のもとに行動を起したのは、一九二四年の護憲運動が最後である。つまり、加藤（友）、山本（権）と薩派中間内閣がつづいたあと山県閣の跡目を継ぐ清浦奎吾が政治舞台に登場しようとしたときである。明治維新の功労というはるか昔の遺産を同一出身地であるからというだけで引きつぎ政治的力を持ち得た藩閥なるものは、この時点において基本的に廃絶されたと見なされる。このあとでは、どのような政治勢力も、何ほどか民衆の意見とか利益を代表しないかぎり、少くともそういった体裁を採らないかぎり、生きのびることができなくなったのである。体制内の

対抗勢力を後景に追いやり政治権力をほぼ独占するに至った政党は、その機能を人民の管理支配に純化する方向に向った。一九二五年四、五月、普通選挙法と治安維持法を各公布することによって、人民大衆をより直接的に掌握するとともに、そこからはみ出る部分への弾圧を強化しようとしたのは、その象徴的な表われといえよう。

話をもどして、一方民衆運動は第一次大戦後急速に継続的かつ組織的な力へと成長していった。それはまず、彼ら自身の存在を認めさせあわせて政治への参与を要求する普通選挙権獲得運動という形をとった。こうして、藩閥の権力独占に対抗するというレベルで、まだ充分には力を蓄え切れていなかった政党と結びつく道が開かれた。他方において、前代「民衆」と一括されていたなかから「無産階級」といういっそう明確な形態が現われ、抬頭した。彼らの運動は、友愛会において典型的なように、はじめ、無資産者も人間である、相互に団結して助け合おう、というものであったけれど（たとえば光吉悦心『火の鎖』河出書房新社参照）、まもなく転じて労働条件・賃金などの改善をもとめるようになっていった。つまり、資本家や地主による過大な経済利益の享受にたいし、訂正を、したがってけっきょく削減を要求するまでになっていった。以上要するに、政治的、経済的な利益をすでに味わっている者たちにたいし、まだそうできないでいるひとたち（とくに無資産者層、参政権をもたない多数者）が、自分たち自身に目覚めかつそのことを周囲に、そし

て最終的に権力にたいし認めさせようとしたのが、二つの運動であったのである。いいかえれば、連動体系としての政治的—社会的権力、すなわちブルジョア国家体制—権力にたいする被支配階級の自立と対峙をはらんだ運動——いましばらくその内実は措く——として、それらはデモクラシーの一環であったのである。

状況がそのようであったので、アナキズムやサンディリカズム、総じて混沌未分化の社会主義思想の被支配各層への侵透—受容がじつに素早かつたのだ、といえよう。アナキズム、サンディリカズム対ボルシェヴィズムという分岐の形成は、一七年ロシア革命の勃発後、とくにボルシェヴィズム獲得後の諸事情が日本に伝わってくるなかで、進行した。一方の旗頭、大杉栄は『自叙伝』のなかでそのことを明言している（岩波文庫版参照）。ボル派は労農露国を高唱し、主として総同盟内の社会民主主義派と連携しつつ、反アナキズム—自由連合の戦線を組んだ。

ところで、普通選挙—ブルジョア議会にたいしてどのような態度をとるべきか、という問題は、いわゆる明治社会主義以来の論争点であった。アナ派の系統は、普選が実現されるタイムテーブルにのったこのころになってもいぜん、議会排撃—すべての労働組合による総罷業という方針を変えなかった。そして彼らは、知識階級指導者たちをきびしく非難し労働者自身の起ち上りをよく訴えつづけた。そういったなかで、第一次日共は山川均が「無産階級運動の方向転換」（『前衛』一九二二

共産主義派と社会民主主義派の競合と対立

年七・八月合併号）を発表して、政治—議会進出、経済—直接行動という二元論ディレンマをうちくたき、圧倒的大衆による政治的急進運動を展開せよと唱えた。そこから、ブルジョア議会のいわゆる革命的利用へも通じる道が切り開かれた。また、後の労農派や社会民主主義者などおもに知識階級が中心となって、単一合法無産政党結成が企図され、二三年一二月、第一回政治問題研究会が開催された（翌二四年六月、政治研究会となる）。ふつう右翼社会民主主義者と規定される幹部を擁した総同盟も、二四年二月、いわゆる現実主義的方針への方向転換宣言を発表、議会進出をふくむ諸改良政策の積極的利用を打ち出した。そして、日共、ビューローの働きかけによる日本農民組合の提唱によって、全国単一無産政党創りは政研、総同盟をもふくむひとつの大きな流れに合し、二五年一二月農民労働党結成に至ったのである（ただし即日禁止）。

以上一九二〇年代前半において、既成政党と民衆運動の大正デモクラシー的結合は二極に大きく相分れ、前者はブルジョア支配権力の構築へ、後者は被支配無産階級としての自立と権力対峙へ、突きすすんでいった。そうしたなかで、無産階級自体の起ち上りは相当の昂揚を見たが、それにともない被支配人民の自立と権力対峙の仕方いかんをめぐる潮流の分岐を見た。逆に、政治運動における分化は社会運動に波及した。一九二四年以来の総同盟内の日共派と社民派の対立は二五年五月の分裂、つまり左派—日共系による評議会結成へと到達、同七月には政研内部に

おける激突となった。こうして、一九二六年末、無産陣営は、日共党（ただし非合法）、労農党、日労党、社民党、日農党という四派に分裂したのである。その間、分裂を合理化し、あるいは助長するための論争や理論化の試みもなされた。一九二五年六〇九月志賀・赤松間の「科学的日本主義」論争や二七年四〇一二月高橋龜吉・猪俣津南雄などの間の「プチ・帝国主義」論争は、その一部である。

二

このような大まかな時代認識を背景とし本稿においては、まず簡単に二〇年代初期におけるアナ対ボル・社民連合を扱ったのちに、ボル対社民（とくに右翼社民）の競合と対立の過程を描きだそうとする。そのため、デモクラットからボルシェヴィキ、そして（右翼）社会民主主義者へと「驛馬」のように走りぬけ、三〇年代初頭にはきわめつきの「革新右翼」つまり日本ファシストになり果てた赤松克麿（一八九四年一二月〜一九五六年二月。山口県徳山町生れ）に焦点をあてる。赤松という人物の生き方Ⅱ考え方は、推移し転換していく時代状況を素直に、だが極端な形で映しだしていたからである。

すこしあとに吉野作造の女婿となった赤松克麿が社会運動に入ったのは、言われているようにいくつか個別の事情もあったのであろうが、大局的に見て契機をなしたのはやはり「旧制度に対する漠然たる革命主義

であった。そしてインテリゲンチヤ特有の人道主義が強い基調をなしたことは争はれない」（赤松「新人会の歴史的足跡」『社会民主主義の旗の下に』忠誠堂、一九三〇年、二〇一ページ）。そのころ彼の目指していた目的は、一言でいえば「徹底的革命」であり「全部の改革」であった（「解放運動の真精神」『デモクラシー』一九年七月）。すなわち、経済、政治、教育、外交の各制度などすべて「凡そ不合理なる根基の上に派生する許多の文物制度にして、苟も正しき人文の発達を阻害する物は悉く之れを改革して余す所なきを期す」、とした（同前、八四ページ）。その前提には、唯々諾々の立身出世はぜつたい拒絶する、という強い決意があった。「眼前にちらつく名誉や富や権勢が如何に現実に幻惑的魅力を有するとも、永遠の文化的生命の前には果敢ない群小の泡沫ではないか。……須らく、区々たる学問の特権を放棄して、忠実に恭謙に、人類に奉仕」しよう、と（同誌一九年四月、二六ページ）。

本人自身当時の自分の考え方については、「新カント派」哲学あるいは「新理想主義」と規定していた（「カントと我等」『先駆』一九二〇年二月号、「人道主義的政治思想の難点」同誌同三月号）。あくまでも「現実」、それも経済現象を軸とした「現実に立脚」しつつ、しかもなお「至純なる理想の創造的体现」を目指すのが、その立場であるという（「ソレルの悲観主義と解放運動」同誌同四月号、四〇、四一ページ）。「聡明にして勇敢なる志士の小群」が「自己自身の尊貴なる生命の創造

的運動であり、全人類の厳肅なる文化運動である」解放運動に身をささげる、そのなかのひとりとしてひたすら勇敢かつ悲痛な「苦行者」の道を歩む、というのがそのころの自己像であった（同前四一、四二ページ）。したがって、シヨルジュ・ソレルやサンディカリズム、ギルド社会主義、「カント派社会主義」が是認、肯定されていたのである（「進化論と社会思想」同誌同七月号、七、二二ページ）。

以上は、東京帝大政治学科を卒業する（一九一九年七月）直前ごろから、新人会本部（駒込動坂町、七月から同富士前町）で合宿生活を送り、東洋経済新報社翻訳係（？）となった時期のことである。

もう少し具体的にこのころの彼の考え方を見ておこう。出発点には、のちの行路変遷のほとんどすべてが萌芽状態であれ蔵せられているはずだからである。つぎの三点を確認したい。

(一)「顧みれば五十年来の我等が国の生活も亦強国の威嚇と略奪に対して自己を守らんが為めの悲痛なる悪戦苦闘であった。斯くの如くにして我憐れなる政治家と軍人とに自己がなめた苦き経験に依って軍国的帝国主義者となさしめられた。そして兄弟等の国は今其余殃に苦しみつゝあるのである。」（「朝鮮青年諸君に呈す」『デモクラシー』一九一九年四月）。

(二)「吾が大和民族の使命は軍閥者流の所謂国威を中外に発揚することではない。時代後れの富国強兵でもない。亜細亜の盟主となって我物

共産主義派と社会民主主義派の競合と対立

顔に振舞ふことでもない。支那や西比利亞に利権を獲得して侵略的資本主義に成功することでもない。」（「発刊の辞」同誌一九一九年三月）。

(三)「我等は国境の内外を問はず、デモクラシーの要求に反する制度と階級を打破しなければならぬ。……此の世界文化の黎明期に際して、吾が大和民族の採るべき態度は、潔く固陋なる物質的優越感と権勢的優越感を棄てることである。」（「国際平和運動と大和民族」同誌一九一九年一〇月）。

(一)の論旨は、日本は強国の圧迫にたいし自己防衛に努めていたところ、軍国的帝国主義者になってしまった、というものである。そこでは、自らが帝国主義であることと「強国の威嚇と略奪」とは並列されたまま、ともに否定されるという形になっている。つまり、国境の内外を問わず(三)を見よ)、奸佞、俗悪、無理想を否認し、いっさいの不合理なものもを改造しよう、というのがその基本姿勢なのである（前掲「発刊の辞」）。あわせて権勢や物質的な優越感を棄てること、つまるところ個人的（当代まぎれもない特権階級の帝大出身者）ならびに日本人としての帝国主義的特権者意識を多少とも自己批判―否定するべきことが、じつに感傷的に、エリート臭をたっぷり残しながら、主張されていたのである。だがしかし、それが、大和民族の使命として唱えられているところを見ると、かえって一種のナショナリズムとさえ疑いたくもなるというものだ。彼赤松は、つぎのようにも言っているから、なおさらであ

る。つまり、各人は「独自の個性」を保ちつつ「社会文化に寄与するの共同目的」を持つが、「国家は現代に於いて最も纏りたる社会の一形式である」、だから「国家の文化発達に貢献するの権利と義務とを有する」〔参政権の原理〕前掲誌一九年三月)、と。こういった文を見れば、ナショナリズムの疑いはさらに濃いものとなる。しかしながら、ここは論を元にもどしてとりあえず、その自己否定はきわめて不充分であった、とだけ確認しておこう。逆に、そのような不充分性が媒介として機能したため、軍国的帝国主義と帝大的特権意識にひたっている多くの青年たちを説得し、自己否定と合理的改造の運動へと脱け出させ起ちあがらせていくのにもまたかえって多少とも役に立ったということに、注意を喚起したい。

赤松克麿に見られたこのような現体制に対する限界つきの感傷的な自己否定と反逆は、彼が中軸のひとりであった新人会メンバーのすべてにも多かれ少かれ認められた。新人会から友愛会に入った先駆者・麻生久も、「其動機が、或る一つの純真な思想と云ふものの上に立ってゐたのか、行き詰った身の振り方の転廻策に思想を担ぎ上げたのか、その辺のところは判然たる意識がない。恐らく両方だった交ぜであらう。唯其当時単純な私共の頭には思想が自分を導くと意識されてゐて後者は潜在してゐたであらうが意識されてはゐなかつた」(「一九一七年前後」麻生久編『新社会的秩序へ』同人社書店、一九三二年、五五七〜八ページ)。

傍点引用者。以下同じ)と記し、功名心の混在を認めている。赤松に「宣伝」をうけて一九年九月新人会本部入りした徳山中学同級生・林要も、当時の手紙のなかでいっている、「じぶんは将来、世の常の人の進む道をたどることはあるまい。それは今の社会がゆるさぬ。一生食うにも困る生活を送るかも知れぬ。が、食えないものの余りにも多い世の中の矛盾に目をとじることはできない。妻をめとり家をなすことなどは考へてもみない、家の財産の分配に預かろうなどは夢にも思っていないから、その点お含みおき願いたい、財産はむしろ罪悪だと思う。じぶんは願わくばただ真理と結婚したいだけである。」云々と(「新人会のことろ」『歴史をつくる学生たち』東大生協出版部、一九四七年、一六六ページ所引)。新人会の研究者として著名なヘンリー・スマスは、これらをまとめて、彼ら新人会員は大学にたいし退屈と幻滅を感じその特権閉鎖性の打破を叫んだが、不徹底であり、そこには「矛盾と偽善」さえ存在した、としている(松尾・森沢『新人会の研究』東大出版会、一九七八年、五六〜六〇ページ)。

この不充分性に関連しては、アナルコ・サンデカリスト、大杉栄(一八八五〜一九二三)が当時いち早く鋭い批判を加えていた。「要するに……労働者を本当に知らないと同時に又自分をも本当に知らない」知識階級のひとり赤松克麿にたいして、同階級が歴史的に権力階級を擁護し被圧階級を欺瞞しかして来なかつたことを「反省」し、「こんどこそ

は被圧階級の真実の友達になるのだと云ふ新しい覚悟とに徹底してゐなければならぬ」と痛撃した（「知識階級に与ふ」『労働運動』一九二〇年一月一日）。そして、労働者は、たといそれが理想家的な労働運動活動家のものであれ他からの理想や意見の押しつけや「指導」そして相互抗争を拒絶し、『其の深刻な経験』による知識的能力」を独自に形成・発展させ（「労働運動と知識階級」同前）、もって自発的・自立的に運動を展開するものだ、と論じた。大杉のこのような立論は特有のものであつて、原則的には間違ひでない。だが、それをじっさいに実践に移すためには知識階級の根本的な自己反省と、さらには知識の在り方あるいは創り方自体を今までのようなものから大転換すること、なかにづゝく外国直輸入の学習方式の放棄ぐらいは少なくとも含む大きな改革が必須であつた。ところが、これにたいする赤松の反論を見てみると、そういった事情はいっさい理解されなかつたことが窺える。自分自身の在り方を否定的に促え直すことのないまま、相変らず「誠意と見識とを備へた知識の協力」が労働者と労働運動の現状況下においては必要だ、と繰り返されていただけなのである（「労働運動と知識階級の問題（評論の評論）」『先駆』一九二〇年二月）。赤松は真に労働階級自身の立場に立っていないかつた、と言わざるを得ないであらう。

この小論戦は、二二年九月三〇日ごろ頂点に達したアナ・ボル対立の前哨戦のひとつであつた。論争自体は小競合いでしかなかつたが、議論

は労働者の自立と他からの働きかけに指導という本質的な対立点をふくんでいたのである。赤松は、その後二〇年八月友愛会総同盟本所支部顧問となり、一〇月から新人会機関紙『同胞』の編集兼発行人をつとめた（一九二一年五月）。この間、日本社会主義同盟の創立発起人のひとりとなり、一月、同機関誌の編集委員。一一、一二月に長崎の香焼炭鉱争議に参与したのを初めとして、翌二二年一月現在、全日本鉱夫総連合会の相談役、同二月以降北海道炭鉱汽船争議の応援を行ない、四月尾尾銅山の争議に関わり、七、八月神戸の三菱・川崎両造船所大争議において後者の指導を分担して大活躍したという。この年一〇月の総同盟十周年大会には、鉱夫総連合本部の代議員として出席、軍備撤廃をもとめる本部案の提案説明を行なつた。二二年四月、日本農民組合創立（理事長杉山元次郎）とともに、法律顧問につく。六月、他とともに対露非干涉同志会を提唱し結成する。七月現在、総同盟宣伝部長である。そして同月、創立間もない第一次共産党に参加、九月決裂した日本労働総連合大会のさいにはボル派の立場をとつた。

要するに、赤松克麿におけるボル派への移行は、野坂鉄（のち参三）、松岡駒吉など新人会とその周辺人脈、さらには山川均・堺利彦など社会主義者との交友関係の側面、つぎに争議関与に指導という実践的側面、そして労働露国への信頼を軸とした思想的側面から総合的に説き明されなければならぬ。なかでも、いちばん最後の側面がことに重要な役

割を果したことは、よく知られている通りである。労働者が天下をとったということが、当時の日本社会主義者や労働階級をどれほど激励、鼓舞したのか。赤松によれば、このころまで、運動は少数の殉教的志士によるもので「世の常の人の進む道をたどる」ことはない（前掲）と思われていたのが、ここで「世界の生命の本流は力強く転回」し、今や「人類解放の時代的大潮流に棹」することとなったのである（「萬物は流転す―発刊の辞」『同胞』一九二〇年一〇月）。このような促え方は、当時の雰囲気を実に反映したものであってよいであろう。友愛会（のちの総同盟）主事・松岡駒吉は、赤松が卒業した一九年七月以降、彼書いた『東洋経済』のロシア紹介記事を読んで感激、共鳴し、これとつき合うようになった、と回想している（『総同盟と赤松君』『日本及日本人』一九五六年二月号、五一ページ）。一九二〇年一〇月には、取締の嚴重さに恐がったボルをさしおいて大杉栄らが、コミンテルン主催の極東社会主義者会議（於上海）にあえて出席したことは、周知であろう。大杉はそれほどよく革命に、それを日本でじっさいに起こすことに、惹かれていたのである（大杉「日本の運命」二一年一月、参照）。じっさいこの時期は、ロシア革命の伝播によって「民主主義や社会主義の思想が浸透し……その影響が僅かの期間に急激に表面に現われた。……世の中ががらっと様子が変わった感じ」であった（山川・向坂編『山川均自伝』岩波書店、一九七二年、三八二～三ページ）。そうした気運が、同

二月一〇日、種々雑多な思想や人物を総集した日本社会主義同盟を創らせたのであった。

ところで、一九二一年半ば以降、アナキズム派對ボルシェヴィキ派の分岐は、ひじょうに明確になった（協定会編『最近の社会運動』二〇三、二〇七～一〇ページ参照）。すなわち同五月二八日、日本社会主義同盟が結社禁止となり、山川均らの水曜会、堺利彦らのML会、荒畑勝三らのLL会、市川正一らの木曜会というふうに分散した（『日本共産党史（戦前）』公安調査庁、一九六二年、八ページ）。そうしたなかで六月、友愛会が脱退したため労働組合同盟は分裂した。これを契機に、両派の対立は一挙に吹きだしたのである。論点は、直接には知識階級労相運動指導者の問題であったが、その底には運動全般の進め方をめぐる違が存在していた。思想的には、ロシア革命の評価、とくにボルシェヴィキ一党独裁をどう促えるかという問題が、中心をなした。ボル派は、しだいに山川均・水曜会系が重きをなし、やがては中核となる。対するは、もちろん大杉を軸とする一派である。彼は帰国後まもなくソビエト・ロシアの一党独裁を批判し、あらためて自由連合を強調していた。これが対立の基本構図であった。そうしたなかで赤松克麿は、ひとつには、争議にいつそう深い関わりを持つようになっていくなかでアナ派の知識階級労働運動指導者排斥論によりつよく反発を感じたため、他方では、ロシア革命における「無産階級の独裁政治」を肯定（二〇年一〇月

二〇日の講演の題目。田中惣五郎編『資料大正社会運動史』上、三一書房、三四八ページ）することを通じて、ボル派へと接近していった。

「近東諸国の一帯が、労働露国の赤流に浸潤せんとするの形勢に在る……英国政府も誠に内外多事」（『社会主義』二〇年一月）という赤松の認識は、組合に組織された無産階級によって世界帝国主義が今にも倒壊される、という当時の日本労働運動活動家に共通する「革命的昂奮」の心理を表わすものであった。

二一年中に、総同盟の知識階級幹部何名かは外へ放逐された（棚橋、久留、賀川、麻生ら。鈴木は名誉会長へ）。残った幹部は、反知識分子という感情から、あるいは「中央集権組織による戦闘力の集中」というその方針のゆえに労働露国の一党独裁制に引き寄せられたため、（あるいはその両方の理由で）、ボル派に接近した。松岡駒吉によれば、「ボルシェヴィストは云うまでもなく中央集権的ですから、我々に好意的であった」のである（前掲五二ページ）。

三

こうして、ボル派はいわゆる総同盟帝国主義の社民派（ただし、いまだ潜在的）と癒着連合し、自立した組合どうしの自由な結合を主張するアナ派と対決した。このころ赤松克麿は、「端的に云へば我々は何よりも先に資本主義組織の殻を脱することを考ふ」（「闘争か和合か」『同

共産主義派と社会民主主義派の競合と対立

胞』二〇年一二月）、「労働組合運動の終局の目標は、明らかに資本主義的社会制度の改造と萬民和楽の新社会建設に在る」（「労働組合を離れて労働者の城壘なし」『鉷山労働者』二一年三月二日）と主張しており、状況認識においては反資本主義の革命派である。だから、松岡などの改良主義社民派とは、思想的な一線を画してははずである。ところが、他方、運動・組織論の分野ではアナ派に反対し、「組織」と「秩序」を重んじ「堅実に」持久力をもつこと（前掲『鉷山労働者』）、「決して軽挙盲動に出でず、あくまで結束を固めて威風堂々」「一糸乱れざる」集団行動をとり妥協をからとることが「勝利」だ（「足尾事件を顧みて」『同胞』二一年五月）と述べ、松岡や麻生などに味方したのである。つまり、この点では、「戦闘的ナ労働者」（杉浦啓一訊問調査『現代史資料』(9)四四五ページ）の精神ないし在り方とは対極的な位置に居たわけである。以上のことは、赤松克麿個人に則していえば、反アナと親ボルの狭間にあった、あるいは状況認識における革命主義と運動・組織論における日和見主義に引き裂かれていた、というふうに分かれる。そしてそれは、時代状況の客観的な大勢として見れば、革命的戦闘性が解体して二極分解し、アナ派とボル派がその片割れのみを保有するに至る悲劇的な方向への過渡を示すものであったのである。

一例をあげよう。一九二〇年七、八月ごろ、山本懸蔵と高田和逸（東京電機及機械鉄工組合芝浦支部）の働きかけで、東京鉄工組合の田口亀

造、市村光雄、関根晃信ら十数人の活動家が参加する「左党連盟」が、総同盟のなかに創られた。同グループの彼らは、翌年八月の神戸の両造船所ストを大挙応援したりしたという。さきに見たように、このストの指導を担当したのは赤松であったのだから、そのころ総同盟傘下の戦闘的労働者のあいだにおける赤松の役割は小さくなかったことが、推認される。その後も、このグループは左派としてさまざま活躍するのだが、一九二一年末から翌年初めごろのアナ対ボルの亀裂のなかで山本や田口らは後者に、高田らは前者に分れ、けっきょく「左党連盟の活動は沈滞して、その組織も、事実上、消滅してしまった」のである（野坂参三『風雪のあゆみ』四新日本出版社、一九七七年、一一七～八ページ）。こうなったのはアナ・ボル対立のゆえであり、あるといえば両者に政治責任があるだろう。社民派と一時的かつ自覚的に結んだのではなくて曖昧に癒着したボル派も、またボル派との戦闘性どうしの政治的提携ではなくて、逆に彼らを改良派との癒着に追いやったアナ派も、ともに日本プロレタリアートの革命性を解体し、その階級意識成熟をむしろ阻んだ責を負わなければならない。

さてところで、赤松自身はその後左傾をつづけ、一九二二年七月第一次日本共産党が結成されるやまもなく、これに加盟する。そして、主に総同盟内（本部入りは二一年一〇月ごろと推定）や論壇などで活躍をつづけ、二三年五月ごろ、予想される検挙に備えた留守中央委員のひと

りに任命されるまでになるのである。松岡によれば、「堺利彦君が麴町共産党の総帥で、赤松君は麴町共産党のメンバーのように見受けられた。野坂（参三）君は少くとも山川君を中心とした大森共産党でした。……間に関連はもとよりあったに相違ないが、それなりに二つの流れがある。麴町共産党は赤松君を中心として、大森共産党は野坂君を中心として中堅青年組合員の獲得に努める具合です。そして総同盟の中に相当の勢力を扶植したのである」（前掲）という。これは野坂にいわせれば、さきの「左党連盟」の再建であり、さらに年末ごろには、総同盟内外の左翼を結集してその全国化を志すものとしてあった（同前一八～二〇ページ。メンバーは河田賢治、横石信一、市村光雄、松尾直義、田口亀造、内田富次郎、中島仙八、望月源治など主に東京鉄工組合員。他に関西の西尾末広も）。しかしながら、そこにおいて自伝がいうほど野坂の役割は大きくなかった、と考えられる。当時ともに総同盟内共産フラクのメンバーとして活動した鍋山貞親は、いつている、「サン、カリズムの風潮に乗って、一部がいちぢるしく左傾化した総同盟を、あわよくば、日本共産党の指導下に入れようと、策動これつとめたものである。その仕事では、俊敏並ぶもののない赤松君が、絶大な役割を演じたのである。野坂参三君も同じ仲間の人だったけれど、いつでも、何事でも、赤松君に引きずりまわされ、唯々諾々と、追隨する以外、なんら為すことなような有様であった」（鍋山貞親「印象鮮やかな人」『日本及日本人』

一九五六年三月号、五〇ページ」と。

徳田球一の述べるところも、趣旨はほぼ同様である——このときの党は「各分派ノ結合」を基礎としたものであったので、争いがあった。なかでは、党員数と労働者数で山川均、荒畑勝三らの「水曜会セクト」が最大の勢力を持っていた（十一回訊問調書『現代史資料』②七七ページ）、と。野坂参三も、つぎのように言っている、「わたしは、近くに住んでいた山川の側近ともいふべき上田茂樹や西雅雄から党中央の方針と思えるものを聞く機会があったから、まだよかつたが、多くの下部党員は、二言三言の打ち合わせで、上級党機関からの指示もないままに、自分たちの考えで、当面する諸闘争に参加していた」（前掲九〇ページ）。つまり、「反共主義」者の松岡と鍋山の証言は、党側の徳球と野坂のそれによって大局的には裏づけされる、と見ることができるのである。

すなわち、一九二二年後半から以降、赤松克麿は野坂参三と協力し、山本懸蔵や鍋山貞親ら半戦闘的労働者と組んで、総同盟の共産主義化に尽力したのであった。また、日本労働組合総連合の問題では、ボル派のひとりとしてアナ派とはげしくやり合ったすえ（二二年九月決裂。前掲野坂自伝四一三〇〜四六ページ）、同一〇月、総同盟一〇周年大会宣言を起草してその後始末をし、あわせて綱領上の階級化を果したのであった。

同党における分派抗争と分散性のため、また赤松がその後まもなく解

党論から国家社会主義へ「裏切」ったため、同人が日共党時代これ以上じっさいにどの程度の活動をしたか、確定することがひじょうに難しい。そういったなかではあるが、いわゆる解党論を見るに、第一に、「共産党ノ内容ハ悉ク官憲ノ手ニ判明シテ」いるから、運動を続けても捕まるだけだ、「一度解体シテ再組織」しよう、という側面があった（杉浦啓一訊問調書、前掲四六八ページ）。二三年暮保釈で出てきた杉浦は、「組合ノ干係デ赤松ヤ野坂参三ト親シクシテ居リ」未熟だったので、ついそれに賛成したという。とくに大逆罪適用を恐れていた堺利彦も、この理由をとって、適用回避を考えていたといわれている。

もうひとつの側面は、やや本質的な問題をふくんでいる。佐野文夫によれば、党指導部の逮捕、関東大震災のさなかでも特別の活躍がでななかった、「白色テロル」も荒れていた、といった理由から同党は事実上崩壊していた、と前提する。この点は他にもそういつているひとがいるから、確認できよう（たとえば、前掲『山川均自伝』三九八ページ）。その上で、(一)党が各グループの連合体でしかないこと、したがってイデオロギーと組織的活動における不統一、(二)運動方法の欠陥、つまり個人的関係に頼って大衆団体を動かそうとしていたこと、(三)日本の社会的発展にたいする具体的・客観的認識の欠如を指摘し、「以上三ツノ根本的欠陥ガ党ヲ大衆カラ遊離孤立セサ党ヲ一個ノ『セクト』的存在タラシメタノデアル」とする。そういった認識を持っていたところに、「現在、諸

条件ノ下ニ於テハ」党再建を行つてもさきと同じような党が生まれざるを得ないから「将来ニ於ケル再建設ノ為メノ根本的ナ手段トシテ」解党しなければならぬ、という重大提案が「某」からあったというのである。（以上、佐野文夫調書『現代史資料』④三七二―五ページ）。

「某」は山川均（『寒村自伝』、高瀬清『日本共産党創立史話』青木書店、一九七八年。当人は自伝で否定）とふつう言われているが、赤松克麿であってもおかしくはない。少くとも赤松は、そのいわゆる根こそぎ解党論を熱心に支持したことは、間違いない。野坂参三も、最初のつよい支持者のひとりであった（前掲高瀬書一八九〇―九〇ページ。佐野文夫調書―前掲書三七五ページなど）。渡辺政之輔以下労働組合関係の党员も、市川正一などの幹部も、ただ荒畑を除いて、すべて解党に賛成したのであった。

高瀬清によれば、解党論にはいくつか流れがあったという。だが、山川ないし赤松の運動・組織論からするものは、とくに検討するに値するであろう。さきに引用した野坂、徳球、さらには鍋山、松岡、それに佐野文夫もあわせて考えれば、三つの根本的欠陥自体は当時現に存在していたことが明らかに認められるからである。

解党論を組織論上の日和見主義と見なすことができると思えば、二一年半ばごろ、つまり入党直前以来一貫して赤松克麿は日和見的な組織論をとっていた、とひとまず言うことができる。二〇年代後半の公判や調

書においてそのころの日共党幹部は、赤松らを口をきわめて罵しり、今日に至る「史実」を形成しているが、それは誤りである。赤松が「悪い」とすればずっと前からであり、したがって入党自体、また党员としての活躍自体「悪い」のであり否定されなくてはならない、ということになる。事実、日共系の歴史研究書は圧倒的にそうなっているから、たとえば最低『野坂自伝』に沿って書き直されなければならない。歴史の偽造は正されなくてはならない。

ひるがえって、冷静客観的に当代状況を促えれば、さきの三点にわたる欠陥それ自身は、正当な指摘であるといえよう。前衛党の建設ないし樹立の仕方、運動の展開法、情勢認識といった理論方面は、当時一般に、ひじょうに未発達だったであろう。赤松克麿は、そのような時代状況を、またしても極端に代表してしまったのである。

さて、そのような赤松は、日共党時代、時代認識に歩をすすめたか、日本帝国主義論に近いものを展開するようになっていった。すなわち、まず第一に、「共産主義革命が世界の一切の資本主義没落に就いての普遍的の鍵であるという前提」に立ったうえで、「各国の革命行程を漫然と一律に」考えるのではなく、「各国には夫れ／＼社会的特質があり、夫れ／＼特種的革命行程がある」「日本には日本の社会的特質があり、それに準拠する日本の特種的革命行程がなければならぬ」とした。少しのちのことと引きくらべれば皮肉としか言いようがないが、彼はこれ

につぎのような付加をした。「尤も日本の社会的特質、日本の特種の革命行程という意味が、国粹会式の迷信的愛国主義から来たものでないことは勿論である」と。要するに、ここで、各国それぞれの特殊性を踏まえた普遍性こそが重要なのだと先駆的に主張されたのである。赤松はそういった考えを、総同盟本部結めの「實際運動に従う」立場（以上引用は「二種の革命行程」『進め』二三年四月）から獲得したと見られる（松岡前掲論文も、そう証言）。

その場合問題は、特殊性と普遍性の結びつき方いかん、である。これに関連してその前月、「反動のいろいろ」（『改造』）で赤松は上杉慎吉の専制主義・普通選挙論・土地国有論、高島素之の忠君愛国社会主義に言及し、「本質は保守的であつても、一面新しい時勢に対する用意を見せて居るから、宣伝が旨く効を奏して、運動の組織が整頓して居れば或る程度の勢力を占めるかも知れない。併し、今日の日本は思想の進歩が案外に早く、知識階級、労働階級、地方青年等に向つて小ブルジョア流の自由主義乃至インタナショナル社会主義がドシドシ侵透しつつあるから、狂熱的な愛国運動がイタリーのファシスト党程の成功を収めるかどうか疑問である。僕はこの種の運動は我国では大したことは無いように思われる」と述べた。思想の流行と進歩という一種の情勢論があるばかりで、これでは情勢が変れば「大したこと無い」では済まされなくなる。「實際運動」の「経験」にもとづく地すべりにたいして、歯止めが

共産主義派と社会民主主義派の競合と対立

ない。だがしかし、逆にいえば、愛国ナショナルリズムやその狂熱性には反対する、ということが、この時点では明確にされていたのである。いかえれば、二三年（前半期）において赤松克麿の特殊性認識は開かれ醒めたものであり、ナショナルを踏まえたインターナショナルを骨幹とするものであった。二二年のいわゆるブハーリン・テーゼが全世界的なプロレタリア革命一本槍であったという背景を考慮に入れば、日本の革命行程があるんだというその主張は、抽象的ながらとりあえず貴重であったと位置づけることは充分可能である。

つぎ第二に、朝鮮など植民地問題の導入がある。もともと赤松は「朝鮮青年諸君に呈す」（『デモクラシー』（九年二月）において、「一国が自国の利益の為に他国の意思に反して是れを支配するが如きは断じて不可である」とし、とくに強圧、差別的待遇、威力と制度による人民の声の圧伏は「非人道の極」であり反対だと述べた。つづけて、だが、資本家のくびきのもと自分たち労働者は連帯の手を伸べ切れない、とも記した。そうしてみると、二三年四月の論文「二種の革命行程」においては、ウイリアム・ポールに依りつつ、日本を露西亜よりもむしろ英国寄りに促えていた、と見られるのである。そうだとすれば、つぎの英国についての一節はひじょうに示唆的である、「英国の支配階級は其の政治的権力を自国の労働者に対する搾取に依って保って居るばかりでなく、それは植民地及保護国に根底を有する強い財政的支柱に依って擁護され

て居る」(前掲二三ページ)。財政収入の側面からだけ植民地を促えることは、ひじょうに狭い視野に立つものと見ざるを得ない。しかもなお、日本支配階級の政治権力による朝鮮「労働者の掠奪」という発想(同前)を、間接的ながらここに窺うことのできるのは貴重である。「無産階級の民族運動から見れば被征服人種たる黄人種の中には日本と云ふ強大なる資本主義国家が存在して居て、現に同じ人種の朝鮮人の民族運動の如きは其の鋒先を日本の帝国主義に向けつつある」(「黒人種解放運動の現勢と其の傾向——人種闘争と階級闘争」『改造』二三年八月号)、というのが、その傍証となるであろう。

以上をまとめれば、このころ赤松克麿の革命論は、日本の労働組合と政党が中心となり、朝鮮人(ら)の反日帝民族運動(同前ならびに『改造』七月号)に助力されて、まずもって「日本帝国主義資本主義の没落」倒壊をはかり、ついで朝鮮など極東民族の自決、極東無産階級の解放をもたらすべき、といったものであったろう。そのためにこそ大衆的運動の展開を(「農民運動の飛躍的発展」『赤旗』二三年四月、六六ページ。「我国に於ける労働組合の生存闘争(一)」『階級戦』二三年七月、三〇六ページ)、と高唱したのである。彼はそれをすでに「現実化の傾向」(前掲『階級戦』三一ページ)と呼んでいた。一九二三年末ごろ革命論の動揺が見られ、二四年以降日和見的な運動・組織論と革命的な状況認識の矛盾が前者の線、で止揚統一され、ついに「現実主義」という

名の社会民主主義に結実するのである。

こうして、一九二四―五年、政研と総同盟を舞台に社会民主主義派對共産主義派は苛烈な分裂抗争を闘い、「科学的日本主義」論争、福本イズムの盛行、「プロテクトナリズム」論争を経て、分裂は固定化されていく。そして、そのように明確かつ激烈に分裂した無産陣営の在り方に、間接的に援護されつつ、日本帝国主義はアジアへの侵略と搾取、国内の抑圧をより強め、革命的な中国反帝ナショナルリズム運動との直接的な対峙関係に入っていく。そのようなはげしい時代の流れのなかでもまた、赤松克麿はひとつの渦心を形づくり、時代状況に規定されつつも逆にまたそれによい影響を及ぼしていったのであった。

〔付記〕 本稿を執筆するに当り、親友・鈴木正節氏に多大なお世話をうけた。記して深い感謝にかえる。

〔本学文理学部助教授(日本史) 一九七七―七九年度個人研究員〕